



**蜜肌で教えてあげる**  
恋人の美姉の誘惑

**天草白**  
挿絵 / ズッキーニ

**立ち読み版**

第一章	恋人の美姉と蜜肌レックスン……………	4
第二章	私をイカせられるかしら？……………	66
第三章	初体験は優しくリードしてほしいんです……………	108
第四章	お姉ちゃんより気持ちよくしてくださいね……………	151
第五章	姉と妹、どちらとエッチしたいの？……………	185
第六章	美人姉妹の魅惑のご奉仕……………	226
エピソード	僕の恋人は……………	280

## 登場人物

Characters

### 成田 圭一

(なりた けいいち)

三上姉妹と同じアマチュアオーケストラに参加する高校生。由希子と付き合っているが、ひょんなことから恋人の姉・清香に性の指導をしてもらうことに。

### 三上 清香

(みかみ さやか)

アマチュアオーケストラでコンサートマスターを任される実力を持つ女子大生。むっちりとしたグラマラスボディの持ち主で、性に関しては経験豊富。

### 三上 由希子

(みかみ ゆきこ)

中学時代からの圭一の恋人。クラス委員長を務める真面目な少女で、性に関しては若干消極的。姉とは異なりスレンダーな体型で、美乳の持ち主。

「あーあ、何やってんだろ、僕」

すぐ近くの公園まで来たところで、ベンチに座って深々とため息をつく。気持ちがいまいちもやもやしたままで、腹の底に不快感が残留していた。

「あらあら、拗ねるなんてまるで子どもですね」

ふいに背後から声をかけられた。

落ちこんでいる自分を見られたくなくて、圭一は顔を背けたままだ。

気分が沈んでいるとき、由希子のほうから声をかけてくれたのは嬉しいのだが、それを素直に表せるような状況ではなかった。

「……放っておいてくれよ」

「そうやってすぐ逃げ出すのは、圭一くんの悪い癖ですよ」

凶星だけにムツときた。

「放っておいてくれって言ってるだろ」

「そんなに怒らないでください」

由希子が悲しげな声でつぶやいた。

「大好きな圭一くんが落ちこんでいると、私まで悲しくなってきました。……だから元氣出しなよ、圭一。男の子でしょっ」

「えっ、由希子ちゃん？」

彼女らしからぬ口調に、ハツとして振り向く。

悪戯っぽい笑みを浮かべて立っていたのは清香だ。どうやら由希子の声色を使って、圭一をからかっていたらしい。

「なっ、清香さん……!？」

「あはは、こんな古い手に引つかかるなんて。お主もまだまだよのう」

「……冗談はやめてください」

イラッとして、そっぽを向く。

「心に余裕がないから、余計に由希子とギクシャクするんじゃないかな」

「……! そ、それは」

「キツく聞こえるかもしれないけど、でも圭一のために言うよ。今のあなたってなんだか張り詰めすぎてる」

清香の口元からは、すでに悪戯っぽい笑みは消えていた。真摯な表情で語る。

「由希子もそんなんじゃないよ圭一と気楽に話せない。ますます距離が離れていくばかりだよ」

圭一は言葉を返せない。一つ一つの言葉が胸に沁み入るようだった。

「ちよつと言い過ぎたかな? ごめん」

「……いえ、清香さんの言う通りだと思います」

頭の中が冷えてくると、清香の叱咤を素直に受け入れることができた。

同時に自分の精神的な甘さをキチンと指摘してくれたことに感謝する。

「圭一は素直だね。むしろバカ正直っていうのかな?」

清香が苦笑した。

「……なんかバカにされてるような」

「してないよ。正直なのはいいことだぞ。そういうところを由希子は好きになったんだと思う」

くすりと笑う清香。

「私も、圭一のそういうところ、好きだな」

「えっ」

どきん、と心臓の鼓動が跳ね上がった。

恋人の美姉の小悪魔めいた美貌がすぐ目の前で微笑んでいる。じつと見つめていると、神秘的な輝きを宿す切れ長の黒瞳に吸いこまれてしまいそうだ。

「やだな、今のはほら、人間として好きっていうか、そういう感じ?」

「驚かせないでくださいよ」

「だから、そういうところが素直なんだってば。ちよつと素直すぎ。ふふ」

一方的にからかわれている気もするが、おかげで心が軽くなったのも事実だった。

「それはそれとして——今日はどうする？ さっきのことを引きずってるみたいだし、

『練習』して自信をつけさせてあげよっか？」

薄紅色のルーージュが塗られた唇に艶めいた笑みが浮かぶ。

その笑みの意味するところを悟り、圭一は頬を赤らめた。

「これがラブホテル……」

圭一は落ち着かない気持ちで部屋の内装をキョロキョロと見つめる。

知り合いに見つからないように、と清香が運転する軽自動車で二つ隣の市のラブホテルまでやって来たのだ。

清香は車中で気軽に話しかけてくれたが、圭一のほうは緊張が高まってほとんど上の空だった。

由希子との初体験未遂も、清香に童貞を捧げたときも、ともに圭一のアパートでの

行為だったため、ラブホテルを利用するのは初めてのことに。

通常のホテルと明らかに異質な雰囲気を利用する、男女の交わりのためだけに存在する空間——。

意外なほど明るい室内は一見して淫靡なイメージとは程遠く、しかし逆に不思議な圧迫感と、それ以上に下腹がジュンと疼くような期待感をもたらしてくれよう。

「この間は圭一から責めるパターンだったから、今日は逆にしよ。こんな美人の女子大生がご奉仕してあげるんだから、光栄に思いなさいね？」

言うなり、清香は圭一の足元に両膝をそろえて座った。上目遣いに見上げる瞳には、小悪魔を思わせる妖しい輝きが宿っている。

清香はすでに上着を脱いでキャミソール姿になっており、見下ろせば魅力的な胸の谷間をはっきりと覗くことができた。薄い生地を内側からばつばつに押し上げた豊かな二つの膨らみは、中央で寄って深い峡谷を作り出している。

（相変わらず清香さんのおっぱいって、すごい……!）

あの狭間に顔を埋めたら、あるいはペニスを挟んでもらえたら、どんなに気持ちがいいことだろう……そんな魅惑的な妄想がとめどなく湧き上がってきて、下腹が甘く火照った。

「すごいね。ズボンの上からでもアレの形が分かりそうなくらい」

清香は少年の欲情の高まりを感じ取ったのかくすりと笑い、手慣れた仕草で圭一のズボンに手をかけてファスナーを下ろす。

ホテルに入ったときから、少年のシンボルは期待感ではちきれんばかりに膨張していた。たぎりきった欲情の熱を発散し、フル勃起状態の肉茎をファスナーの隙間から引っ張り出される。

「あっ……!!」

「ホントに元氣だね。お姉さんが気持ちよくしてあげる、ふふ」

瞳を爛々とさせた清香の相貌が、圭一の股間にゆっくりと近づいてきた。甘酸っぱい吐息が敏感な亀頭をくすぐり、その刺激だけで若い竿がびくと跳ねる。

「ん、むう」

ルージユの塗られた朱唇がOの字に開き、怒張した器官をぱっくりと啜えた。

「うううっ!」

圭一は歓びの声を上げて、天井を仰いだ。ヌメヌメと温かな口腔に亀頭が、カリが、長い竿が、ずるずると飲みこまれる。同時に柔らかい舌肉が肉棒の先端の丸みに沿って、ねつとりと巻きついてきた。

「うぐうつ、き、気持ちいい——」

絶妙の口淫に全身をわなわなと震わせた。

清香のフェラチオは絶妙で、躍動的に動く舌が亀頭に巻きついては甘美な圧力をかけてくる。チロチロと鈴口をくすぐられ、竿をぱくぱくと咥えた唇がペニスを心地よく搾る。

熱く柔らかな口の中で、圭一の肉棒がびくびくと跳ね回った。こみ上げる快感の波が下肢を痺れさせる。

（うわあつ、清香さん、なんてエロい顔！）

頬を窄め、唇を突き出したいやらしいフェラ顔と、普段の颯爽として格好のいい清香の顔との淫らなギャップが、少年の官能をチリチリと刺激する。

同時に高まる射精感。このまま何も考えず、口腔いっぱい精を注ぎこんだらどれほどの肉悦を得られるだろうか。想像するだけで脳髓がピンクに霞む。愉悅の上昇が尿道を熱く引きつらせ、圭一は下腹を落ち着きなく揺らした。

本能のおもむくまま、思うさまスペルマを放つてみたい——脳内が猛烈な射精欲求に染まっていく。

「ん、ちゅ、ぱっ……けいい、ち……れろ、ちゅ、簡単に……んんっ……まだ、出し

ちゃ……ん、れるお、ダメだよ……?」

亀頭から肉幹に沿ってねっとり舌を這わせながら、清香はチラチラと圭一を見上げ、鋭い視線で釘をさす。

「は、はい、うぐぐ……でも、気持ちよすぎ、てえ……うあああつ」

鼻腔を膨らませて喘いだ。自分でもコントロールしようとしているが、愉悅の高まりが激しすぎてどうにもならない。

ダメだ、もう出る――。

圭一が限界を迎えようとしているのを敏感に察したらしく、清香が口の動きを緩めた。先ほどまでリズムカルに踊っていた舌もスローダウンし、快楽の波が少しずつ引いていく。

「はあ、はあ……もうちょっとで出ちやいそうだった……」

下腹の火照りとペニスの甘い痺れを心地よく感じながら、圭一は深々と息をつく。

「ダメ。簡単にイッたらレッスンにならないでしょ?」

セックスの経験値の差を見せつけるかのように、清香は優越感たつぷりに告げた。ヌラヌラと唾液に濡れた唇が笑みの形に開き、綺麗な白い歯列と真っ赤な舌がいやらしくのぞく。

年上の女子大生の手のひらの上で完全に弄もてあそばれている――。

彼女の意志一つで射精感を引き出され、また緩められてしまう。その事実にはほんの少しだけ悔しさを敗北感を覚えたが、それ以上に熟練した性技に翻弄される心地よさが圭一を陶醉させていた。

清香は豊かな胸元をたふんと揺らし、くすりと笑った。

「圭一、こっちも味わいたんじゃない？ さつきから私のおっぱいを見るたびに、オチンチンが元気になっていくもの。お姉さんにはお見通しだぞ」

圭一は返す言葉もなかった。経験豊富な小悪魔女子大生の前には、童貞同然の少年の心理などお見通しらしい。

清香が立ち上がってキャミソールを脱ぎ、そのまま流れるような動作で真っ赤なブラジャーも外してしまふと、カップの中に窮屈そうに押しこめられていた重量級の肉塊二つが弾けるように飛び出した。

日焼けとは無縁の真っ白な肌は光り輝くよう。頂点で震える桃色の乳首と乳輪はバストサイズに比べるとやや小ぶりで、しかしそのひっそりとしたたたずまいが、清香本人と同じように可憐だ。

（綺麗だ……！ それにすごくいやらしいよ、清香さんのおっぱい！）

こうして彼女の裸の胸を目にするのは二度目だが、一度目の感動からまったく減じることなく、胸の内側がジンと熱くなる。

いや、清香と一度具体的な行為に及んでいっただけに、目の前でふるふるると小刻みに揺れる乳房がなおさらいやらしく感じた。これからあの双丘で自分の最も恥ずかしい場所を挟み、扱しごき、責めてもらえるのだと想像しただけで、勃起が増す。

「あら、まだ大きくなるなんて。そんなにお姉さんのパイズリを味わいたいんだ？ いいよ、たっぷりと気持ちよくしてあげる」

くすくすと笑いながら、清香がふたたび圭一の足元に跪ひざまずいた。裾野を両手のひらで支えるようにして、たっぷりと肉の詰まった量感豊かな乳房を持ち上げる。たぶん、たぶん、と波打って揺れる二つの肉球が勃起した肉茎を左右から挟みこんだ。

「う、ああっ」

生まれて初めてのパイズリに嘆声を漏らす。敏感な亀頭や竿に直接触れた乳肉は生クリームのように柔らかく、熱く蕩けた感触だった。清香が左右から乳房を寄せて、徐々に圧迫を加えていく。

深い谷間に挟みこんだ状態で、ゆっくりとバストを上下動させた。その動きに伴って緩慢な摩擦感が男根に優しい快樂刺激を送りこむ。

「うう、じわじわくる……！ あ、気持ちい……ふわあ！」

間断なくこみ上げる肉悦に下半身からは次第に力が抜け、立っているのも困難なほどに両膝が笑う。

「男の子の感じてる顔……可愛い、ふふ」

対照的に、清香は嗜虐的な笑みを強め、メロンサイズの乳肉を上下に弾ませながら上下動の速度を増す。圭一をいたぶるようにパイプリの圧力を強めると、それに応じてペニスに走る快樂電流が爆発的に上がった。

「はあ、はあ、あつ、ダメだ、イキ……そ……」

「もうちよつとだけ我慢だぞ？ これはレッスンなんだからね」

一転して、乳丘の上下動スピードを緩める清香。刺激が弱まり、放出寸前まで高まっていた射精感がすうつと遠のく。

とはいえ、快感そのものは下腹に残留したまま。自分の意志で射精させてもらえず、主導権を完全に清香に握られている格好だ。

「ううっ」

双乳の谷間に挟みこんだ男幹をスローペースでじつくりと摩擦したかと思えば、一転して素早い上下動で熱い刺激を送りこんでくる。



爽やかなショートヘアを揺らし、由希子は喘いだ。

ぴっちり閉じていた肉の唇は花が咲くように綻び、奥からヌルヌルとした透明の蜜を垂らしてくる。ヌルヌルとした体液は圭一の口内に流れこみ、もぎたての果実さながらの甘い味が口の中いっぱいに広がった。

恋人の甘露を吸いつつ、なおもクンニリングスを続行する。びくん、びくん、と稲妻に打たれたように何度も全身を痙攣させる由希子。

(あのおとなしい由希子ちゃんが、こんなに感じてくれるなんて)  
初体験を一度失敗していることが嘘のようだった。

清香を相手にクンニリングスを何度も実践したことを思い返し、舌を自在に跳ね回らせてクリトリスやラヴィアを舐め、突き、圧迫しては鮮烈な刺激を由希子の性器に送りこむ。

「気持ちいい……あんっ、お、お姉ちゃんにも、こういうこと……ううっ、したんです、か……?」

息を乱しながら、由希子が背中越しに振り返った。

「うん、清香さんに女の人を悦ばせる方法を教わったんだ。ごめん……」

「圭くんは私のために……ああ、でもやっぱり……ううっ、ど、どうしてもヤキモ

チを……悔しい、の……はあっ！」

下腹部を落ち着かなさげに揺らしながら、由希子が年ごろの少女らしいストレートな嫉妬心を吐露する。

圭一はさすがにばつの悪い思いをしながら、なおも舌をくねらせ、今や完全に肥大化して包皮から顔を出しているクリトリスを舐めしゃぶった。せめてもの贖罪は清香に教わった技巧で、恋人の身体に快感を与え続けることだけだ。

「ああっ、ダメですう、そんなにされたらああっ……！」

圭一の唇や舌が動くたび、由希子の下半身がびくんと弾んだ。先ほどまでびったりと閉じていた肉弁はすっかり綻んで口を開き、その奥からヌルヌルとした甘い粘液を垂れ流している。

ぴちゃ、ぴちゃ、という淫猥な水音とともに、次から次へと湧いてくる恋人の蜜を啜りながら、圭一は止めとばかりに腔孔に舌の付け根までを差しこんだ。

「あああああっ……！」

軽く絶頂に達したのか、由希子は背中を弓なりにして喘いだ。万が一誰かに聞きつけられたら、と圭一が焦りを覚えるほどの叫び声。

先日処女を失ったばかりだというのに、ここまで感じてくれるのは驚きの一言だ。

由希子の性感は、もしかしたら姉の清香以上に豊かなのかもしれない。

「お願い、圭くん……！」

由希子は耐えられないというように、切なげな瞳で圭一を見下ろす。

（学校で、本番のエッチまでしちゃうなんて……でも、僕ももうっ……！）

圭一のほうもすでに欲情の限界を超えていた。荒々しい息を吐いて立ち上がると、由希子の引き締まった小尻を抱えこみ、ズボンのファスナーからいきりたったイチモツを取り出す。

「い、いくよ、由希子ちゃんっ」

熱く火照りきった切っ先で臀裂をかき分け、肉唇の中心部にある窪みへあてがう。いわゆる立ちバツクの体勢。圭一は深く息を吐き出すと、腰を前に突き出し、熱く火照った先端部をぬかるんだ膣孔に押しこんでいった。

「あ、はあああああつ、おっきいのが……くるうっ！」

由希子は、清楚な美貌を朱に染めて叫んだ。

「あ、はあああああつ、おっきいのが……くるうっ！」

「うぐ、キツい……！！ あくう」

「うぐ、キツい……！！ あくう」

眉間に皺を寄せ、下半身に渾身の力を込めて同級生の少女の内部に己の生殖器官を押しこむ。

処女を奪ったときほどではないが、それでも十分に固い抵抗感。挿入に苦勞しながらも、なんとかキツキツの秘肉をより分けて奥まで差しこんだところで、圭一はゆっくりと出し入れを始めた。

「はあっ、この前とは……違……あんっ」

由希子は悲鳴混じりに細身の上半身を左右によじらせる。

前回の対面座位より、今回の立ちバックのほうがより深く腰を遣える体位だ。圭一はそれを利して、一打ちすること、対面座位では届かない部分まで熱い先端を突き入れ、子宮口を押し上げる。

「ぐうっ、キツイよ、由希子ちゃんっ」

処女ならではのキツキツの膣孔に深く埋めこんだところで一気に引き抜くと、入り口付近の浅瀬を、ぐりっ、と擦る。処女同然の贅肉による締めつけの強さがダイレクタな快感となつて下腹を灼熱させた。強いストロークを浴びせると、周囲の贅肉がいつせいに絡みついてきて、目の前で鮮やかな火花が散る。

この快感をもっと得ようと、圭一はがむしゃらに抽送を叩きつけていく。じゅぷ、

じゅぷ、と結合部から透明な飛沫が勢いよく飛び散った。

「んっ、ふあああっ！」

スレンダーな上体をしなやかに反らせ、由希子が嬌声をこぼした。

明るい太陽を背にして激しいグラインドを繰り返していると、次第に首筋が汗ばんでくる。野外で交わっているのだという実感が強くなり、背徳的な興奮が増した。

圭一は背中から手を回して制服のボタンを乱暴に外した。ブラウスの前をはだけると、純白のブラジャーに包まれたCカップの美乳が女子校生ならではの弾力で勢いよく揺れながら、ぷるんと飛び出す。

完璧な球形を誇る左右の乳房は息を飲むほど美しく、頂点で細かな痙攣を繰り返す薄桃色の尖りは感動するほど可憐だ。

「い、いや……恥ずか」

「由希子ちゃんっ……!!」

指先を鎖骨から脇腹までせわしなく這わせ、やがて目的地である双丘まで到達したところで、ブラジャーのカップに指をかける。

「あ、いやっ……!!」

カップをずらしてすべすべとした乳肌に直接接触されると、由希子は恥じらいの声と

もにビクンと上体を反らせた。

「柔らかいのにごく弾力があって……気持ちいいよ、由希子ちゃんのおっぱい」

熱い吐息混じりに囁く。力を入れれば入れるだけ、同じだけの弾力で指先を跳ね返してくる。圭一は左右の乳房を鷲掴みにした状態で、ぐに、ぐに、と思うさま揉みだいた。

「やあつ、は、恥ずかしい、です」

由希子の声は甘くかすれていた。誰かが屋上に目を向ければ見られてしまうかもしれない状況で乳房をあらわにされ、触られているのは、品行方正な優等生少女にとって相当の羞恥のはずだ。

「それに、私……お姉ちゃんみたいに、おっぱいが大きくなって……」

どうやら姉とバストサイズを比べられているのではないか、という不安が羞恥を増幅しているらしい。確かにサイズだけなら、清香のほうが由希子よりもずっと豊かな乳房をしている。

ただ由希子の乳房には心地よい触り心地や瑞々しい弾力、そして何よりも惚れ惚れするほど美しいお椀形のフォルム——清香とはまったく異なる、由希子だけの魅力があるのだ。

「由希子ちゃんのおっぱい、すごく可愛くて好きだよ。触ってるだけで蕩けそう……くう、うっ」

圭一は熱い想いを言葉にして、甘い吐息と一緒に恋人の耳元に吹きかけた。小ぶりの肉球を揉みしだきつつ、ピストンの勢いを増していく。バックからの抽送の勢いに合せて、プルプルとできたてのプリンのように柔らかく揺れた。

「く、ふうっ！」

指先でお椀形のバストの頂点に位置するピンク色のニップルに触れると、由希子はふたたびやるせない悲鳴を上げた。

「やああ……お胸、気持ちいい、ですう……んはあっ！」

サイズは小さめだが、乳房の感度は抜群のようだ。特に乳首の周辺が気持ちいいらしい——クリトリスに続いて、責めるべきポイントを見出した圭一は、ここぞとばかりに集中的に弄<sup>いじ</sup>った。

新鮮なグミのように瑞々しい乳首を指先でつまみ、コリコリと揉み潰す。

「だ、だめ、そこ……ヘンになっちゃ、んっ、くあああっ！」

焦りで表情を歪め、必死で懇願する由希子の姿が、圭一の下腹部に癡猛な劣情を燃え上がらせた。止めるどころかますます勢いこみ、指の腹での圧迫を強めて、小さな



乳首を押し潰す。

のみならず親指と人差し指で敏感な尖りをつまみ、なおも乳首を揉み潰すような動きを続行して、さらなる快樂刺激を送りこんだ。

「やああ……さ、さつきから、ダメって、何度もお……うう、んっ……圭一く……あんっ……い、意地悪です……ふあああああつ！ や、やめてえ」

「やめないよ……く、ううっ、す、好きな人に気持ちよくなつて欲しいからっ……！」  
ぱん、ぱん、と肉と肉を打ち合わせて、圭一は渾身の抽送を叩きこむ。ギユウツと膣内が収縮し、ただでさえキツイ締めつけがさらに強まった。ペニス全体を押し潰されて、甘い快感が下肢に電流を走らせる。

「私もお……す、好きっ……ああっ、大好き、圭一くん……んんっ」

恋人への慕情をあらわに叫んだ由希子は、背中越しに振り返り、唇を突き出してキスをせがんだ。

真昼の陽光を浴びて、プリンとした唇は綺麗な桜色に輝いている。濡れて光沢を放つそこに吸い寄せられ、圭一はししゃにむに由希子の唇を吸った。

自分への思慕をまっすぐにぶつけてくれる恋人の一途さにゾクゾクとした陶酔が胸にこみ上げる。

「んんっ……」

多幸福感に全身を浸しながら、瑞々しい唇を無我夢中で吸っていると、由希子の舌先が圭一の唇を割って口内に侵入してきた。

「ぐむう、ちゅ、れろお……んん、ぐ」

おとなしい少女からの積極的なディープキスに圭一は驚きで目を丸くする。が、すぐに舌を踊らせて相手の舌を迎え撃つと、互いの舌を絡ませて濃厚な口づけに浸った。くちゅ、くちゅ、と淫らな音を奏で、唾液を交換し合い、唇を貪りながら、腰を打ちつけ合う。上下の口で繋がりが合った激しいセックスが、圭一の下肢に甘痒い肉悦を波紋のように広がらせていく。

圭一は最大限の興奮を燃え立たせ、ひたすらに腰を打ちつけた。そして清楚な恋人もまた欲情で一匹の牝となり、身も心も躍動させる。

「も、もつと……もつと突いてください。私、負けたく、な……はあ、はあっ……！お、お姉ちゃんにしたみたいに、もつとおっ！」

キスを解いた由希子は、瞳を爛々とさせてさらに強いピストンを要求し、自らも引き締まった腰を振りたくった。

「圭一くんに応えられなかった……はあ、はあ……あ、あのとときの自分が、悔しくて

……！ 今度こそ、私……はあ、はあ……圭一くんの全部を、う、受け止めたいんです……う、あんっ……！」

ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぱんぱんぱんっ……と、圭一の打ちこみを、瑞々しい桃尻が迎え撃つ。互いの性器が深く結合し、一分の隙もなく繋がりが合った部分から透明の飛沫が勢いよく飛び散った。

さらに圭一は指先を乳房から脇腹の辺りまでツーツと下ろしていき、滑らかな肌を撫でながら鼠蹊部へと到達する。ふっくらとした恥丘を軽くさすった後、おもむろにクリトリスをつまんだ。

「うあんっ、そ、そこはあぁっ……！！」

先ほどのクンニリングスに続き、ふたたび敏感な性感帯を責めると、由希子の下半身が激しく波打った。すでに充血を増してふっくらと膨らんでいる恥豆を指で弾き、圧迫する。

指先を通じて、乙女の肉真珠が愉悅の痙攣を起こしているのを感じた。敏感なクリトリスを断続的に責めつつ、逞しい先端部でデリケートな子宮口を、がつつ、がつつ、と連続して突くのも忘れない。

「あああつ、あ、うんっ、メチャクチャにしてくださいっ！ ん、ふあつ、私の身体

を全部……あんっ、け、圭一くんだけのものにしてええええっ！」

がしゃがしゃがしゃっ、と一際激しく金網フェンスを揺らした後、その揺り戻しで、由希子の上半身がぐんと力を失った。か細い呼吸音とともに両肩が緩やかに上下している。

由希子がセックスで初めてのオルガスムスを迎えたことを知り、圭一は胸がすくような陶酔を覚えた。

ひく、ひく、と膣の中が細かく痙攣して、ペニスに絡みついてくる。自身のシンボルを温かな粘膜にまさぐられる心地よさに浸りながら、イッたばかりの女体をさらに昂らせようとピストンを再開する。

「あんっ、そんな——私、まだ……ああっ、身体が、もつと……はあんっ、ヘンになっちゃ……はううっ！ あああんっ！」

怯えた声を漏らし、抽送から逃げようと腰を左右に振る由希子。ほっそりとした蜂腰を両手で掴んでガツチリと固定すると、圭一は体重を込めて容赦のないスラストを柔らかく蕩けた膣に打ちこんだ。

絶頂直後の肉洞は痙攣をさらに強め、不規則に動く贅肉は自らの意志で男の精を搾り取ろうとするかのように、男根の切っ先から付け根にまでどこかまわず吸着する。

ギユウツと絞られて、ペニスに甘美な電流が走った。

「ううっ、由希子ちゃんの中、うねうねして……し、絞られ……ぐううっ」

射精感の急激な高まりに、圭一はくぐもった声で呻いた。下半身に断続的に走る甘美な痺れ。腰の動きがフィニッシュを意識した性急なリズムに変わり、小刻みなピストンを連続して叩きつける。

一打ちごとにリズムを強めていく肉棒が、狭い膣内で不規則に脈動する。射精の予兆を感じ取ったのか、由希子は引き締まった小尻を打ち振って圭一を迎え撃った。

「出してえ！ いっぱい出して！ 私の中……圭一くんのせーえきでいっぱいにしてくださいっ！」

無我夢中の絶叫に応えて、圭一はさらに律動を加速させる。ペニスの芯に官能の電流が響く。そして最後に渾身の一突きを恋人の肉壺に見舞い、ぱんっ、と音を立てて最奥まで埋めこんだ。

「ぐうっ、由希子ちゃ……はあっ、はあっ……な、中で出すよ！」

圭一はそのまま小刻みに腰を震わせると、遠慮のない勢いで大量のスペルマを膣に注ぎこむ。至福の放出感で脳髓が蕩け、同時に灼熱した。びゅくっ、びゅくっ、という吐出の振動が膣内を激しく震わせる。

「あーっ……熱い、圭一くんの、精子……ふああああっ、幸せえ……！」

精液の進りに子宮を直撃されて、由希子もまた二度目の絶頂に達したのだろう。スレンダーな肢体をよじらせながら、嬉しそうな顔で嬌声をこぼす。

「ふうっ」

圭一は精巣が空になるまでたっぷりと注ぎこみ、満足のため息をついてペニスを抜き取った。ぽっかりと開ききった膣孔から収まりきらなかったザーメンが、ごぼ、ごぼ、と逆流して流れ落ち、屋上にプンとした青臭い匂いが漂う。

「ああ、こんなにたくさん出してくれたんですね……」

己の内部から白濁の糸になってこぼれ落ちる精液を見下ろし、由希子がうつつりとした顔でつぶやいた。それから圭一の下半身に目をやる。

少年の分身器官は、さすがにあれだけ大量の精液を放出した直後だけあって、半萎なえ状態でだらりと垂れ下がっていた。

と、由希子がおもむろに跪き、体液まみれの肉茎を口に含む。

「えっ、由希子ちゃん……!!」

フェラチオにあれだけ羞恥を示していた少女の突然の行動に、圭一は驚きと戸惑いを隠せない。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



**ヴァルキリー**

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**

<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>



キルタイムコミュニケーションの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!